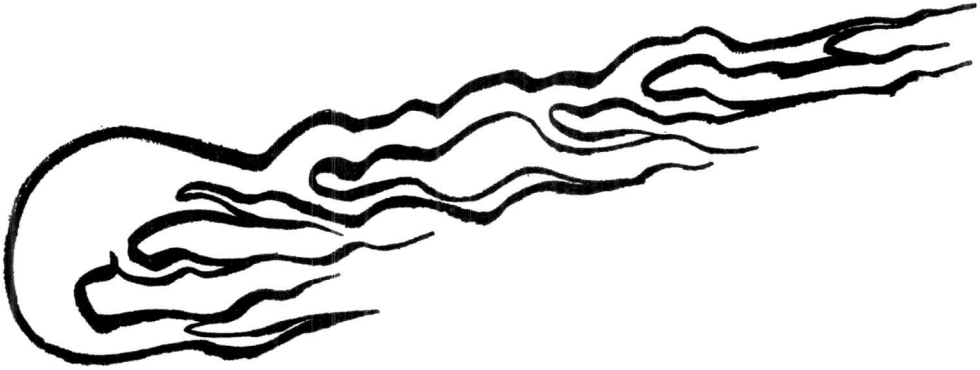
水木しげるの妖怪事典

水木しげるの妖怪事典

東京堂出版



著者略歴

一九二四年鳥取県境港市に生まれる。武蔵野美術学校中退。

戦後多くの職業を経ながら紙芝居を描く、後に貸本漫画の世界に入る。当時の代表作に「悪魔くん」などがある。

代表作――「ゲゲゲの鬼太郎」(講談社)「河童の三平」(小学館)「水木しげる短篇集三部作」(筑摩書房)「水木しげるお化け絵文庫(全十巻)」(彌生書房)「東西妖怪図絵」(読売新聞社)「ふるさとの妖怪考」(じゃこめてい出版)などがある。

水木しげるの妖怪事典　二二〇〇円

昭和五六年九月一〇日　初版発行
昭和五八年八月一五日　四版発行

著者　水木しげる
発行者　岩出貞夫
印刷所　株式会社三秀舎
製本所　協和製本株式会社

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒一〇一）
電話東京二三三局三七四一　振替東京三一二七〇

1539-156232-5164

© Shigeru Mizuki 1981
検印省略

目次

河童の国……8
かわうそ……10
水虎……12
ガータロ……14
海坊主……16
化鯨……18
佐伯の人魚……20
さとり……22
大入道……24
魃鬼……26
ぬっぺふほふ……28
たたりもっけ……30
古木の怪……32
たんころりん……34
枕返し……36

地蔵堂……38
いやだにさん……40
手足の神……42
道通さま……44
弁慶堀の河太郎……46
ガラッパ……48
水蝹……50
川猿……52
シバテン……54
一目入道……56
岩魚坊主……58
大旅淵の蛇神……60
水精翁……62
沼御前……64
かに坊主……66
若狭の人魚……68
博多の人魚……70
大蛸の足……72

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

舟幽霊……74
海難法師……76
石見の牛鬼……78
髑髏の怪……80
板　鬼……82
麻桶毛……84
古　椿……86
常元虫……88
お菊虫……90
場所に住む霊……92
古屋の妖怪……94
井戸の神……96
かまど神……98
倉ぼっこ……100
納戸婆……102
貧乏神……104
めし食い幽霊……106
猫の神通力……108

大蜘蛛……110
狸伝膏……112
大かむろ……114
札返し……116
天女の宿……118
つらら女……120
飴屋の幽霊……122
みかり婆……124
山中の幽霊屋敷……126
山の神……128
山婆……130
鬼女……132
わいら……134
一本足……136
天狗……138
天邪鬼……140
百鬼夜行……142
大坊主……144

行逢神……146
悪路神の火……148
小池婆……150
幽霊狸……152
篠崎狐……154
野槌……156
囀石……158
オッパショ石……160
朱の盤……162
空神……164
ばたばた……166
力持ち幽霊……168
ちょうちん小僧……170
長面妖女……172
がたがた橋……174
土転び……176
傘化け……178
片輪車……180

後神……182
オバリヨン……184
狐火……186
鬼火……188
天火……190
姥火……192
化け火……194
海月の火玉……196
猫股の火……198
くだん……200
すっぽんの幽霊……202
金魚の幽霊……204
鵺……206
あとがき……209

水木しげるの

妖怪事典

河童の国

子供の時ぼくの家の近くに、下の川という川があって、そこは浮草がおいしげり、なんとなく底がみえない感じだった。

そこには昔から、河童がいるといわれ、子供は誰も信じていた。

その川で水泳をすると、河童が足をひっぱって水の中に沈め、尻子玉をぬくといわれ、河童にやられたか、そうでないかは、尻子玉をみればすぐ分るといわれていた。

ぼくは、こわかったけれども、一度河童に会ってみたい、できれば、二言三言しゃべってもみたいと思っていた。

その頃小学校でどうしたわけかトンビを一羽飼っていた。

そのために「トンビ当番」というのがあり、毎日蛙をとりにゆく当番だったが、ちょうど、ぼくが、あたったので下の川へ蛙とりにいったのだが、どうしたはずみか、川の中へ落ちてしまった。一時は、おしまいだと思ったが、川は意外に浅く、ヘソ位までしかない。ついでに河童でもいないかと、浮草の裏の方をなでてみたりしたが、なにもおらず、石垣の穴でもあるのかと、さぐってみたが、それらしきものもなかった。

ただ、浮草の繁茂しているあたりをうかがっていると、なんとなく、いそうなフンイキなのだが、そんな遠くまで、さがすのは気味が悪いので引き上げたが、それからも学校のかえり、よく下の川をのぞいてみたが、それらしいものはいなかった。

そこで、ぼくは河童がいるとすれば、この長い川の中の一つの横穴で、その穴を入ってゆくと、きっと河童の世界があり、時たま川に現れる河童というのは、その穴から出てきたやつが現れるのだろうと思っていた。

従って横穴を発見し、入ってゆけば図のような河童の世界があるのではないかと思っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かわうそ

昔から、かわうそは化けるといわれ、『妖怪談義』の中にも能登（今の石川県）では、かわうそは二十歳前後の娘や、碁盤縞の着物を着た子供に化けてくる。

「誰だ」というと、人ならば、

「オラヤ」と答えるが、

「アラヤ」と答えるのは彼奴である。

また、「おまえは何処のもんじゃ」ときくと、どういう意味でか

「カハイ」と答えるという。

と書いてある。

ぼくらの田舎（島根県と鳥取県の境）でも、八十年位前までは、かわうそがいて

「よくいけすの魚をとって、みな困ったものだ」

と土地の古老からきいて、おどろいたことがあったが、八十年位前に、海岸や川に、かわうそがいたなんて信じられないことだ。

ぼくらの子供の時（五十年前）でも、夜の静けさはかくべつで、それこそ自分の声が地獄まで、とどくんじゃないかと思うほど夏の夜なぞは静かなことがあった。

そうした時、かわうそが化けて出てきたとしても、そんなに不思議ではない感じだった。今では漁船なぞがたくさんいて、想像もつかないことだが。

お化けというものはやはり、出てくる環境がないとダメなものらしい。

お化けの出る感じを、ぼくらは子供の時知っているから、かわうそが化けるといっても「そういうこともあるかもしれない」と思うが、そういう感じを知らないと、今の鉄筋（てっきん）マンションの中で生れ、成長したのでは、なかなかこの味わいのあるお化けも、やはり感じにくいのではないかと思う。

酒
酒

水虎（すいこ）

「水虎」というのは、河童の中でも親方のように大きく、しかも人に姿がみえにくい。

川とか海中に住んでいて、年に一度、必ず人を海中に引き入れて精血を吸い、屍はもとに返すという。

「水虎」にやられたと思われる死体は、葬式をせずに、板の上に乗せて、畠の中に草庵を作り、その中に安置する。

そうすると、死体が腐る間に、精血を吸った、「水虎」も同じように腐って死ぬといわれる。

その人の屍が腐ってゆく間、「水虎」は、草庵のまわりをぐるぐるまわる。

しかし、人はその形を見ることができず、ただ声だけがきこえる。

「水虎」は、身をかくす術を心得ており、死なないかぎり、姿をみせない。

やがて、屍が腐りかけると「水虎」もまた、たおれて死ぬ。

そのときになって、巨大な姿をあらわす。

「水虎」は九州の筑後川とか、近江の琵琶湖あたりにいるといわれ、夜ふけに戸をたたいていたずらをしたり、人についたりする。

よく山の中で、誰もいないと思って、大きな石をなげると、

「キャッ」

という声とともに「水虎」にとりつかれたという話がよくある。

「水虎」にとりつかれると気が遠くなったようになるといわれるが、永久につくわけでなく「水虎」がはなれれば、その症状はなくなる。「水虎」をよけるには、鎌をかけておくとよいといわれ、また、麻がらとか、大角豆（ささげ）を家の外にまくと、きらってこないといわれる。

ガータロ

『日本民俗図録』という本をみていたら、「ガータロ」というのが出ており、猫みたいなへんな河童の姿をしたものが、狛犬のように、祠の両側にいる。

これはきっと、なにか、水の神で、ここへゆけばまた変わった河童の話でもきけるだろうと、長崎県の五島列島の福江というところまで出かけた。

ガータロを祀った祠はないかときいてみたが、飛行機から石を落すようなものでてんで見当もつかなかった。

島の人に紹介されたところがなんと、流れついた仏像を祀る、仏殿を作るために、粉骨砕身しているヘンなおじさんのところ。おじさんは七十ばかりだったが、サルマタも下着も、穴だらけ。ただひたすら、流れついたヘンテコな仏像を入れる、仏殿建設に熱心なあまりだろうか。

「ウォーイ」とかなんとかいって、上からおりてきたのはよいが、肛門からキンタマから丸見え、そこへもってきて、仏殿なるものが今までみたこともない設計。どこに入口があって、どこから階段をのぼるのか、見当もつかない、先程キンタマが見えていたから、てっきり、おりてくるだろうと思っていると、右の穴（窓というより穴だった）から声がきこえると思うと、左からというぐあいで、声がすれども会えない。やがて入口を発見したが、それは、ユカ下だった。身をかがめて入ると、賽銭箱があり「まずそこに金を入れてくれ」ということで、千円入れると金持だと思ったのか仏殿建設に協力してくれというわけ。

しかし、ぼくは、ガータロを祀った祠を訪ねているというと、なんとじいさんは山の上を指した。

なんだ山の上に河童がいるなんておかしいな、と思いながら、ものすごく急な階段を上ると山上に、あの本でみたのと同じ、ガータロの祠があり、とても見晴しのよい頂上だった。あまり言葉も通じないようなおばさんばかりだったから、早々に山をおりたがなんで山の上にあるのか不思議だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com